

秋彼岸追悼之文

「天長地久 風雨順時」、天地が鳴動せずめいどうに雨風がほどよく恵み

をもたらすようにと幾重にも祈願する。さらに季節きせつ凌霜天地知る」

の道理のもとに、どのような艱難辛苦も、それを凌ぐ強い志をもって

取り組めば天地の神もこれを知って、応えてくれると信じる。今夏の

激烈な炎暑、大雨、強風の台風二十一号、北の大地北海道地震

等々、自然界の猛威が襲いかかるなか、よく耐え忍び乗り越えている。

それだけに新涼の彼岸を迎えて、月の光は高く天中に輝き、自性

清浄の台を照らし、五智所成の花の色は鎮ちんに秘密莊嚴の梢に

開く。琵琶湖湖南を渡る風もいつしか和らぎ実りの秋をさわやかに運

ぶ。

茲に恭しく東方山安養寺観音堂本尊觀世音菩薩を奉り、宝

前に百味五菓の飲食及び香華錠燭を献あげて有縁の檀信徒各家の

諸靈しよりょうを供養せんが為、秋彼岸会を嚴修する。

法要は宗祖弘法大師の伝統の儀軌ぎぎに則り、さらにそのみ教えを

平易へいひに説きあかさされしご詠歌で、日々の修練を重ねている慈苑講中

により奉詠される。誠に豊かなる情感ふくを含んで聴く者の迷いを取り

除く。闇やみを破やつて光明の世界へと導き賜う。

秋彼岸会から安養寺の数多い年中行事も後半に入る。今年の特

に三月末から始まったお四国八十八カ所巡拝の四十回目である。継続四十年をめてたく達成。一口に四十年継続というがなかなか続行は可能でない。偉業ともいえる。このことが去る九月五日付の全真言宗の報道機関紙「ろくだい六大新報」にトップ記事として掲載されると全国各地の真言宗寺院一万二千カ寺に絶賛の反響を呼び起こした。真言宗僧侶で住職として熊谷俊亮和尚のしんし真摯、ひたむきな仏道修行が天下に知らしめられ、多くの賛辞が飛び交う朗報となった。

一方、このたび発行された「安養寺寺報」においては、熊谷住職の大腸癌の発症から手術、リハビリ、抗癌剤服用の経緯に至るまで詳しく告白されている。この秋彼岸会の実践準備、実行へまさに

“命懸け”のいのちが様子がうかが窺われる。

病んで迷い、辛苦に耐える。このシャバ此岸に身をおく者には、全てにふりかかる“約束事”である。この故に安楽にしておだ穏やかなる彼岸へと渡るべく仏道修行が開かれている。熊谷住職は敢えて果敢にあえ澆刺として檀信徒へ、病いを背負いつつ生きる大切さを説き明かされている。

きごころ最上に住める世界は彼の岸、彼岸なりという。この彼岸にたどりつくには、しょうじん精進、じかい持戒、ふせ布施、ぜんじょう禅定、にんにく忍辱、ちえ智慧の六つが徳目。

ろくはらみつ六波羅蜜の“船”ふねに乗って渡らねばならない。精進とは、怠りなく努力を続ける。持戒とは、よく規律を守り人に迷惑をかけない。布施

とは、欲ばらず人々に物心両面ほんしで施す。禅定とは、一息ひとこぎをついてあ

りのままの今の心を見極める。忍辱にんにくとは、無理をせず辛抱を楽しむ。智慧とは、身勝手な知識で惑わずに真実の教えに出会うこと。

そこで再び熊谷俊亮住職のおことばによると、私が今日あるのは、偏ひとへに檀信徒各位の励まし、常に異体いたいでありながら同心どうしんになって一体いったいとなり同行どうこうして下さる御詠歌講 慈苑講の皆様、椿寿会ちんじゆの皆様、そして同行二人どうこうににん、皆様と共に、一時も離れずに頂いているお大師さまのお陰です。この大恩に感謝の日々を送らせて頂き、このたびの癌治療にはお大師さまにこの身を安んじ、委ゆだねて、私自身を勢さといっぱい尽くして行きます」と。熊谷住職の尊いお諭し、身をさし出しての大慈、大悲のみ仏の温容をも、現出されたお姿はまさに四十年間を四国巡拜修行を遂げられた真骨頂しんこつちやうの真価しんかといえよう。

秋の彼岸会を頂き、よくよく善根ぜんこんの功德を賜わり、もって、速やかに仏果菩提ぶつかぼだい、過去聖靈増進仏果を証しょうせん事を。

乃至法界 平等利益

平成三十年九月二十三日

京都府向日市寺戸町西垣内十五―六十四

亀光庵

土口哲光

敬白